
ハヤテのごとく & BLEACH & 灼眼のシャナ

悪霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく&BLEACH&灼眼のシャナ

【Nコード】

N3385F

【作者名】

悪霊

【あらすじ】

ある日の三千院家、ソウル・ソサエティ、虚圏、空座町、御崎市、紅世の世界。これらの世界が1つの世界に集まるとき新たな世界が動き出す……。

プロローグ

それはナギが買ってきたゲームから始まった。

「ハヤテ〜！ちょっと来てくれ〜」

「なんですかお嬢さま？」

「おお、来たかハヤテこの2つのゲームと一緒にやりたいんだが・・・」

2

「ええ、今は仕事もないですしいいですよ・・・って
それBLEACHと灼眼のシャナのゲームのようですが見たことありませんが新作ですか？」

この上の2人は
綾崎ハヤテ、三千院ナギ両名である。

まあ、ちよくちよくキャラをだすのでその時ずつ紹介していきたい

と思います。

「うん、まあなこれは特別に作らせたものだから私が持っているこのディスク1枚しかないんだぞ！」

「それはすごいですねえ・・・ではまずどっちからやりますか？」

「うむ、BLEACHの方を先にやりたいから早速やるか」

と言ってディスクを入れてスタートボタンを押した。

ちなみにどちらともPSS3のゲームディスクである。

しかし、つけてからしばらくするとテレビが突然光り部屋が見えなくなってしまった。

プロローグ（後書き）

さて今回は

ハヤテのごとく、BLEACH、灼眼のシャナ

ごくたまに涼宮ハルヒの憂鬱などを交えて

作っていききたいと思います

一章：第1話：集まる魂

それは一瞬の出来事だった。突然光に包まれた空間。

その光をさえぎるかのように白い・・・いや黒いといった方がいいかもしれない。

とにかく黒いけむりが前方をおおい完全に視界が奪われてしまった。

ハヤテとナギはそのけむりが晴れるのを待つてみることにした。

しばらくするとけむりが少しずつ晴れてきた。

ハヤテはほっと胸をなでおろした。

なにしろナギは暗いところが嫌いなのでハヤテの腕をしっかりとしがみついて

離れなかったのだ。しかし、安心したのもつかの間、

胸をなでおろした瞬間、眼前び数人の見知らぬ人物の影が見えた。

すると再びナギがハヤテの腕にしがみついた。

しばらくけむりの向こうをにらんでいたハヤテだったが

けむりが晴れその正体が明らかになると、ハヤテとナギは驚いた。

それはなんとアニメBLEACHで有名な黒崎一護・井上織姫・石田雨竜・茶渡泰虎が

目の前にいたからだ。一瞬のことだったのでナギとハヤテは硬直していた。

向こうも突然のことだったのだろっ・・・。

いきなりこんなところに出たらしきよんとした表情でこちらを見ていた。

しばらくその状態が続いたが一護が

「お前ら、誰だ？」

と聞いてきた。するとハヤテが

「僕は綾崎ハヤテ。こちらは三千院ナギお嬢さまです。」

と言つと一護は

「そうか」

と答えた。ハヤテはすぐに

「あなた方は、黒崎一護さん、井上織姫さん、石田雨竜さん、茶渡泰虎さんですよね？」

と言つた。すると茶渡が

「なんで君は俺達の名前を知っているんだ？」

と聞いてきたので最初ハヤテは返答に困つたがBLEACHの本とゲームを見せて

「あなた方はこちら側ではこういう本やゲームで結構知られてるんですよ。」

と答えた。すると一護ら4人は驚いた。

なぜならハヤテは自分たちの世界とあなた方の世界は違つと表現したのだ。

「ここはどこですか？」

と井上が聞いてみた。するとハヤテが

「ここは東京都練馬区65%を占める三千院家ですよ」

とりあえず練馬区の65%というのはおいといて、石田が

「ではこの近くに空座町はありますか？」

と聞いてみたが、ハヤテは返答に困っていた。するとナギが

「失礼ですが空座町という地名は存在しません。先ほども説明したようにあなた方の世界と私達の世界はまったく別のものなんです」

と答えた。その後すぐにナギが質問してみた。

「ところであなた方は何をしているときにここに来られたんですか？」

すると一護が

「破面と戦っているときにこっちに来たんだ。」

一護たちの話によれば強大な力を持つ破面（たぶん十刃級）4体に全員襲われ戦闘中に

ここにいたのだという。その話を聞いたハヤテは思った。

このゲームをつなげた直後に一護たちが現れたということは

ゲームによってこのテレビが世界と世界の通り口になったとすれば

そこを通じて破面たちも入ってくることはあきらか。ハヤテは

すぐテレビのほうを見たがなんともうすでに入ってきてるではないか。

それに一護たちも気づいたのか戦闘態勢に入った。

一護は完全に出てくる前に斬ろうとしたが、ハヤテに止められた。
一護は

「なんで止める？」

とたずねてきた。ハヤテは

「あなた方がこんなところで戦闘したらお屋敷が壊れてしまいますよ
！！」

「じゃあどつするんだい？」

と石田が聞いてきた。するとハヤテは

「お嬢さま、そういえばこの前牧村さんに作らせた空間湾曲装置をこの部屋につけていましたね。」

ここで少し説明しよう。空間湾曲装置とはある一定の世界に別の空間への扉をつくることで

まったくその世界とは別の次元の世界を作ることが出来る装置なのである。

ちなみに簡易空間湾曲装置という取り外しが可能で持ち運びができる

装置も開発されている。失礼しました。

「ああ、そこにあるがそれがどうした？」

「ではみなさんそこに逃げましょう。」

とハヤテが言って扉を開けハヤテら6人が中へ入ると、

破面たちもハヤテたちについてきた。しばらく走るとハヤテが

「一護さん、石田さん、茶渡さん、井上さん。ここまで来ればいいですよ。」

戦闘はお任せするんで派手に戦ってください。」

言った。すると4人が戦闘態勢に入り破面の方へ向かっていった。

一章：第1話：集まる魂（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第2話

「くっ、こいつ強い・・・！」

4体中3体はなんとか倒した。

だが一護が戦っていた破面は他の三体とは比べ物にならなかった。

破面は一護の斬月をうまくかわしながら

「なーんだ、みんなやられたんだ・・・。つまんないな」

と言った。一護は一旦退いて、破面に向かってたずねた。

「てめえ、だれだ？」

「僕はNO・11デレンバカン。新たに加わった破面だよ。」

「てめえの目的はなんだ？」

「目的？ないよ。ただの調査さ。でも君達が邪魔するから出来てなかったけどね」

「ふざけんな！！正解！！！」

一護がそう叫ぶと同時に破面に飛びかかった。

「ふゝんそれが君の正解か。じゃ僕も本気で行こうかな」

と言うと、一旦退いて長い長身の刀を抜くと

「吹き飛ばせスウィング！！」

というと突然光を発し刀が2本になった。それもかなり巨大な大刀だ。

デレンバカンは一護はに飛びかかった。斬魄刀と斬魄刀がぶつかり合い

にぶい金属音はするが2人のスピードが速すぎて見えない。

その場にいた他の人たちは同じことを考えただろう。

確かに一護は正解してるのでこのスピードは分かるが

デレンバカンとは2本の斬魄刀を持っている。しかも大刀だ。重量はハンパじゃないはず。

しかし、その斬魄刀を持っていながらこのスピード。はたしてデレンバカンは

NO・11なのか？2本の斬魄刀を持ってこのスピードと戦闘力は十刃であっても

おかしくないレベルなのだ。デレンバカンは

「あゝあ、これじゃ決着つかないなあ。そういえば月牙天衝っていう斬撃技あったよね。

あれ出してよ。」

と言ってきた。一護は

「そんなに見たきゃみせてやるよ!!」

と言って一旦後ろに引いて態勢を整えて

「月牙天衝!!」

と言って斬撃をはなった。だがデレンバカンのはかるく振り払った。

「なあゝんだ、その程度かあ。じゃ僕の斬撃を見せてあげるよ。」

と言うと2本の斬魄刀を一気に振り下ろした。

次の瞬間、一護の肩に大きな傷がついた。いきなりのもので一護は
なにか

起こったかわからなかった。

「な……んだと……なんだよ……これ」

その場で膝をついた。デレンバカン

「何が起きたか分からないって顔してるね。教えてあげるよ。

僕の斬撃は2本の斬魄刀を振り下ろした時の衝撃波。君のような霊圧

を飛ばす斬撃じゃないぶん威力は弱いけど衝撃波だからスピードも速いし、

なにより当たる瞬間まで相手には何も見えない。」

と言った。さらにデレンバカンは

「まったく……。こんな戦いはやく終わらしたちやおうよ。

だいたい調査が終わってないし……。」

「ああ、確かに次で終わる。お前の負けでな。」

「何言ってるんだい？負けるのは君だよ」

一護はデレンバカンの話をスルーして

「あゝあ、本当はこんなところで使うつもりはなかったんだけどな。

気をつけろよ。この状態だと手加減はできねえからよ。」

と言って仮面をつけた。すると同時に一護はデレンバカンの背後に移動し

斬ろうとする。それをなんとか防ぐデレンバカンだったがガードで手一杯だった。

一護はこの零距离から月牙天衝をはなった。

デレンバカンはその攻撃に耐えられず吹き飛ばされてしまった。

くくっ、まさかあんな零距离で斬撃をはなつなんて・・・

いや・・・それ以上に報告は受けていたがなんだあの斬撃の威力は・
・

さっきとまるで違う・・・。くそこれほどまでとは・・・。

そんなことを考えながら態勢を整えるが一護の姿がない。

周りを見渡し一護の姿を確認しようとしていると頭上から一護がせ
まっていた。

なんとかギリギリでかわすことが出来たが、一護の姿はまた見えな
かった。

再び一護の姿を捉えるために探していると

今度は背後から一護が現れ月牙天衝をはなった。

しかし、今度はデレンバカンはずぐに気づき防ごうとするが

一護はそのままさらに月牙天衝を重ねた。

さすがにこの巨大な斬撃を2つ重ねた攻撃を直接くらったらずい。

そう思ってよけようとするデレンバカンだったが

一護はさらにもう1つ月牙天衝を重ねた。

重なった斬撃はいままさによけようとしていたデレンバカンに

さらにスピードを増して向かっていった。

デレンバカンはその斬撃に直撃し吹き飛んだ……かに見えた。

だがデレンバカンは怪我こそしていたが戦闘不能というほどではなかった。

その姿を見たハヤテは

「なるほど。」

と言った。これに対して石田は

「なにがなるほどなんだい？」

と聞いた。するとハヤテは

「僕見たんです。あの破面の人は斬撃が直撃する寸前に自分の虚閃をぶつけて

衝撃を軽くしていたんですよ。ですよね？」

と言つと

「ああ、そのとおりだよ。たぶん虚閃をぶつけてなきゃこんな怪我じゃすまされなかった

だろうね。でもどうしようかなあ。このまま君と戦ってもなんかやられそうだし、

やっぱりここは弱い奴を狙うよ。」

と言うと瞬時にナギの背後に移動し、ナギに斬魄刀を向けた。

「お嬢さま!!」

「てめえ!卑怯だぞ!」

一護はデレンバカンに向かって叫んだ。

「卑怯・・・?人聞きの悪いこと言わないでよ。これも作戦の1つだよ。」

さあ、この子を解放して欲しかったら虚化を解け!!」

そう言われた一護は地上に降りてきて、虚化を解いた。

「じゃあ、この子は返してあげるよ。」

と言うとデレンバカンは一瞬、ナギを解放した。ハヤテは

解放されたナギを迎えに行こうとした。ナギもハヤテの名前をいいながら

ハヤテの元へと駆け寄ってくる。だが次の瞬間、ハヤテの眼前でデレンバカン

はナギに斬撃をはなった。斬撃を喰らったナギは吐血し駆け寄ったハヤテ

の胸の中に倒れこんだ。すぐに井上が駆け寄り双天帰盾で治療する。

その姿をハヤテは呆然と立ち尽くして見つめていた。

一方、一護はデレンバカンに

「てめえ、自分が何したか分かってんのか!？」

と言った。するとデレンバカンは

「嫌だなあ。そんな怖い眼で見ないでよ。つかさ自分で何したかって？」

そんなのわかってるよ。嘘をついて人を斬った。」

それを聞いた一護はさらにデレンバカンをにらみつけた。

「おお、怖い。そんな怖い顔しないでよ。事実を言ったまでじゃないか。」

その言葉に一護は我慢しきれなくなった。斬魄刀を構え今にも飛び掛ろうとしている。

しかし、一護はハヤテにそれを止められた。

「てめえ、なにしやる。離せ!!」

しかし、ハヤテは離そうとしない。ハヤテが離そうとしないので

無理矢理振り切ろうとするがまったく離れない。一護はハヤテの顔をふと見上げた。

すると、なんとハヤテは泣いていたのだ。

「お前……」

するとハヤテは

「一護さん、すみませんがこの勝負僕に任せてくれませんか？」

「ムチャだ！斬魄刀も持っていないお前が勝てるはずない！！」

「大丈夫ですよ。デレンバカンさん、あなたは絶対に許しません」

「ほう、君が僕の相手をする……？斬魄刀さえ持っていない君がかい？」

その奴の言うとおりだよ。僕には勝てない。」

デレンバカンはそういつて、笑っていた。するとハヤテは

「心配は無用です。斬魄刀ならちゃんと持ってますから。

破壊し尽せ『バロム』」

と言うと同時にハヤテの姿が消えた。

「どこだ？どこへ消えた。」

デレンバカン は必死に姿を探す。

「ここにいるよ。」

声の聞こえた方向を向くと異様なまでに巨大な斬魄刀をもったハヤテがいた。

「なんだその斬魄刀は・・・？」

「これはバロムと言う僕の第1の斬魄刀だ。」

そういうと今まで黒装束をまとっていなかったのにまとった。その間からは

さらに別の2本の斬魄刀が見えていた。

「2本の斬魄刀だと・・・！？」

「そう僕は2本の斬魄刀を持っているんだ。じゃ速攻で決めさせてもらおうかな。」

「ふざけるなあ！！」

とハヤテの言葉を否定すると斬撃をはなった。

しかし、ハヤテはその斬撃を斬魄刀で防ぐと瞬時に背後に移動。

あっという間にデレンバカンを斬った。

「くそ・・・、まさかこんなところで負けてしまうとは・・・」

と言うとデレンバカンは消滅してしまった。

「い．．．一撃かよ．．．」

一護はそんなことを言いながらこちらへと戻ってくるハヤテを見ていた。

第2話（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第3話

デレンバカンを倒してこちらに戻ってくるハヤテに対して一護は

「お前……死神だったのか……斬魄刀2本持つてるし
しかも……強いな」

と言った。するとハヤテは少し照れながら

「いやあ、なんでかは知らないですけど斬魄刀持ってたんですよ
強いつて言われても照れますよ。それにもう1つの斬魄刀
は柄しかありませんからね」

と言つて一護に笑いながら2本の斬魄刀の柄を見せていた。

一護はそれを見ながら

<こいつさっきとは全然違う。あんな霊圧見たことなかった……
こいつは一体なんなんだ？>

と考えてると井上が

「黒崎くん、ハヤテくん、ナギちゃんの治癒終わったよ!」

注) ハヤテのことを苗字で呼ぶと綾崎・黒崎で混ざるので名前で呼ぶようにしました。

「あ、井上さん!ありがとうございます」

ハヤテは井上にお礼を言くとナギの元へと近づいていった。

「お嬢さま!」

ナギは眠っていたがしばらくすると眼を覚ました

「……ハヤテ。私は一体……?」

ナギはハヤテを見ながら行った。ハヤテは

「お嬢さまあ!!」

そう叫んでナギを抱きしめた。

「ちょ!?!お前……なにやってるんだ!! 恥ずかしいではないか!!!!」

「……良かった」

「え? ハヤテ?」

「無事でよかった……。お嬢さまが死んだら僕は……。僕は」

「ハヤテ……。ありがとう」

そう言ったナギだったが一護たち（特に一護）が

ひいていたのでハヤテから離れた。

一方その頃デレンバカンは虚圏に戻ってきていた。

「くっ、まさかこんなに怪我を負うとは……。予想外だ。

くそっ！！なんなんだあいつは……。とにかく藍染様に報告しなければ……」

「その必要はない」

後ろから誰かの声が聞こえた。それはウルキオラだった。

「ウルキオラ様。必要ないとはどういう意味ですか？」

「その報告は俺がする。お前は俺の後ろにいる。とにかく今は傷を治せ。」

今回の作戦は絶対失敗するわけにはいかない。

そのために今は1人でも戦力が必要なんだ。」

「残りの3人は？」

「残りの3人はすでに戻ってきて傷の治療をしている。

とにかく行くぞ」

「はい、ウルキオラ様」

と言うと2人は歩いていった。

この話の続きは次話で行います。

場面は戻って元の部屋へと戻っている途中だった。

「さてじゃあ僕たちはまたこっちに破面とか虚とかが来ていたら困りますので

先に行ってますね。」

と言うとナギを抱えたハヤテはあっという間に瞬歩で行ってしまった。

ハヤテは部屋へと戻ってきた。一応また入ってこられても困るので

ゲームの電源を消した。するとマリアが部屋に入ってきて

「ナギ、ハヤテくんどうしました？先ほど部屋に来たときはいませんでしたが・・・」

ハヤテはマリアに事情を全て話した。しかし、それに対してマリアは

「へえ、そうですか」

まったく信じていなかった・・・。

「いやいやマリアさん！なにも信じてないですよね!？」

「まあきつというと思いますよ」

「棒読みじゃないですか!？」

そんなことを言い合っていると

「何騒いでんだ？」

一護たちが戻ってきた。するとマリアは

「あら？本当だったんですね」

「だから、いったじやないか本当だって」

「で？その人誰だよ？」

「この人はマリアさんといってナギお嬢さまの専属メイドです」

「せ・・・専属メイド・・・？そんな人までいるんですか？」

石田が聞いてきた。ハヤテはうんとうなずきナギに

「お嬢さま、BLEACHのゲームで一護さんたちが現れたということは

こちらのゲームもそうなのでは？」

と言うと灼眼のシャナのゲームを手にとった。

「あ、そういえばそうだな。つけてみるか・・・」

「そのゲームがどうかしたんですか？」

井上が聞いてきた。

「実は井上さんたちの時もそうだったんですが

このゲームをやろうとした瞬間に出てきたんですよ。

だからこちらのゲームをやればもしかすると

このゲームのキャラがでるかと思ひまして・・・」

と言うとゲームをセットし電源をつけてみた。

するとさきほどと同様けむりに包まれた。

第3話（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

第4話

けむりが晴れると目の前に現れたのは1人の男だった。

一護は斬魄刀を抜いて構えたがハヤテに止められた。

「坂井悠二さんですね？」

「え？なんで僕の名前を・・・？」

ハヤテはさっき一護たちに教えたようにゲームや本で

悠二の世界とこつちの世界が違うのを伝えた。

悠二はそれをじっと黙って聞いていた。

「あまり驚いていませんね」

「まあ、こつというのは慣れてるからね」

ハヤテと悠二が喋っているとテレビの中から

シャナが入ってきた。悠二は振り向きシャナに近寄ると

「悠二・・・、こいつらはなんなの？」

「あ、シャナ・・・実は・・・」

悠二は先ほど自分がハヤテに説明されたように

シヤナにも自分達とこの世界がまったく別のものであることを説明した。

「じゃあ、ここは紅世みたいなものなの？」

「まあ、多少違いますが、多少はあっています。

簡単に言えばここは貴方たちとの並行世界みたいなものです。」

「そうなんですか……。ではなぜ僕たちはここに……。？」

「実はこのゲームなんですけどどうやら世界と世界をつなげるゲートみたいなものだ

考えております。」

一方その頃、虚圏では……

「お帰り、ウルキオラ・デレンバカン。

じゃあ成果をみせてくれるかな……？」

「分かりました。藍染様。」

ウルキオラは自分の眼球を取り碎いた。

「で、どうだった？ウルキオラ」

「はい。黒崎 一護・石田 雨竜・茶渡 泰虎・井上 織姫はそれ

それ

実力が上がっているようです。特に黒崎 一護に関してはかなりの実力が

ついでるようです。この実力ならもはや十刃でなければ止められないかもしれません。」

「そうか。じゃあデレンバカン。君は何かないかい？」

「はい。今回の戦闘で黒崎 一護の実力、そして戦術自体にバリエーションが増えてる気がしました。ですがそれよりあの綾崎 ハヤテと言う男。

あの男の実力は計り知れません。スピード、パワー、それを生かす頭脳、

戦術のバリエーション、そして霊圧。すべてにおいて

今まで見てきた死神とは別次元の強さです。さらに言えば始解状態であの霊圧は

十刃級に匹敵しています。」

「そうか。報告ご苦労。ではまたあとで集まってもらってから。一旦戻っていいよ。」

「藍染さん。面白い話をしていたな。」

「ん？杭菜と鎌か……。どうしたのかな？」

「なんでもないですよ。これからどうするのか気になるなと思うただだよ」

「ふふ、それはあとで分かるから楽しみにしているといよ」

この二人はなんなのか……

そして藍染が仕掛けている罠とはなんなのか……

第4話（後書き）

小説読んでくれてありがとうございます

ここで皆さんにお知らせです。

オリジナルの死神・破面の名前、

またそのキャラの斬魄刀の名前

解放の名前（死神の場合は始解。

卍解がある場合はその名前も書いてください）

などのことを募集しています。

またここをこうしたらいいのではなどの要望も

募集しています。

作者にメッセージを送るか評価の最後に書いてください

ご協力お願いします

第5話

「では一護さんたちは戻っていてください。」

あとでそちらに向かいますので」

とハヤテが言うと向こうの世界への入り口を開いた。

「んじゃ、行くか!」

一護を先頭に向こうの世界へ入っていった。

「さて、僕たちも行きましょう。お嬢さまとマリアさんは

野々原さん、氷室さん、ヒナギクさん、伊澄さんをおいてください」

別の世界を入り口を開きながら伝えた。

「ではシャナさん、悠二さん行きましょうか」

3人も世界へと入っていった。それを見ていたナギとマリアも

「私達も急ぐぞ！」

急いで部屋から出て行った。

「とりあえずどうします？」

御崎市に到着したハヤテたちは話し合いをしていた。

「どうすると言っても協力を頼むのは2人しかないし……」

「じゃあ、先にヴィルヘルミナさんのところへ行きましょう。案内
よろしく願います」

と言うと向かおうとするが

「これは何事ですか」

「ヴィルヘルミナ、なんでここに……」

「なんでってあんた達いなくなって戻ってきたと思ったら

もう1人変なのがいたから慌ててきたのよ。そこにいるのは誰？」

後ろからマージョリーが現れた。

それから2人に今起きている事態について説明し、協力を願った。

「分かったのであります。今現在の状況は？」

「今僕の世界で先頭に長けた人を集めています。またもう1つの世界にも事態の説明が

されていると思います」

それを聞いた2人はさらに

「分かりました。では、行きましょう」

ハヤテたちは世界の入り口へと入っていった。

一方その頃、虚圏では・・・

「みんな、よく集まってくれたね。ギン、例の物を出してくれ」

後ろにいたギンは「はい」と答えるとモニターをに映像を出した。

「これは強力な実力を持つ者達だよ。一致団結して我々を倒そうと
しているんだ。」

今から選んだ君たち到大虚を率いて現世へ向かってほしい」

十刃のメンバーは静かに聞いていたが

「藍染様、この前見たものも含め知らないものが数人混じってます
が・・・」

「それなら他数人は分からないがさっき見た綾崎　ハヤテと一緒に
居る者のことなら

今回協力してくれている人がいるから聞いてみるといい。じゃあ

ノイトラ、ゾマル、ザエルアポロ、アーロニーロ。君たちに決めたから

行ってくるといい」

一方その頃、ナギとマリアはすでに集まっていた4人に

今の状況を説明していた。

「それは大変なことになってるみたいだね」

「同じ執事仲間としてハヤテ君に協力してあげよう」

今協力を承諾したのはハヤテと同じ執事の野々原楓と

冴木氷室の2人だ。

「私も協力するわ」

「そうですね、すでにこの状況ではいずれこの世界にも影響が及ぶでしょうから

協力するほかないですね」

今話したのが桂雛菊かつらひなぎくと鷺ノ宮伊澄さぎのみやいすみである。

とそこまで言ったところでハヤテ達が戻ってきた。

「あ、皆さん！ただ今戻りました」

「ハヤテ君話は聞いたわ。早く向こうに人と合流しましょう」

と2つの世界の強力なものたちが集まり始めていた。ハヤテは

「皆さんは先に向こうへ向かってください。僕はちよつとやること

がありますので」

ハヤテの言葉にうなずくと世界を開いて入って行った。

それを見届けたハヤテは携帯を取り出して、だれかに電話をかけていた。

「ということなのでよろしく願いします」

と状況を説明し協力を願うと電話口から

「わかった。今から向かう。お前は先に行つてろ」

と言われハヤテはいと答えつい先ほど世界へと入って行った。

一護たちはというと元の世界に戻ってきていた。

その時、

「あ、お前たち！どこにおつたのだ」

後ろからルキア、恋次、日番谷、乱菊、一角、弓親が後ろからこっちに近づいてきた。

一護たちはルキアたちに今起こっている状況について説明した。

「なるほど、そんなことがあったのか。そいつらはどうした？」

日番谷はたずねた。雨竜が

「別の世界ともう1つ別の世界から援軍を呼びに行くと行ってました。」

そろそろ合流してこちらに向かっているころかと」

と言った瞬間、ナギたちが現れた。その後ハヤテも数分後に合流し

「とりあえずソウルソサエティに協力を要請しよう」

と日番谷が言った。だがその瞬間

すさまじい霊圧が周りに響いた。

第5話（後書き）

ここで皆さんに引き続きお知らせです。

オリジナルの死神・破面の名前、

またそのキャラの斬魄刀の名前

解放の名前（死神の場合は始解。

卍解がある場合はその名前も書いてください）

などのことを募集しています。

またここをこうしたらいいのではなどの要望も

募集しています。

作者にメッセージを送るか評価の最後に書いてください

ご協力お願いします。

ただ今のところ特に破面の方を特に募集してますので

よろしくお願いします。

第2章：第6話：破面襲来！！

巨大な霊圧が集まったハヤテ達を襲う。

後ろを向くと4体の破面が立っている。

その1体がこっちに向かってきた。

一護が斬月を手に取り刃を受け止める。刹那鈍い音が周りに響く。

「死神代行黒崎一護だ！」

「クイント十刃^{エスバーダ}ノイトラ・ジルガだ」

「十刃か！なら手加減はいらねえな！」

一護は後ろに下がって間合いをとり

「卍解！！天鎖斬月！！」

「ほう、そいつがてめえの正解か、いい霊圧だな。

これで俺も全力で闘えるってもんだ!!」

と言うと鎌状の形の斬魄刀を上に掲げ

「祈れ、サンタテレサ!!!」

と言った。霧がノイトラを覆い尽くす。

霧が晴れてくると真の姿があらわになる。

頭に三日月のような角が腕が装甲で覆われており6本に増え

そのすべてに鎌持った姿に変わった。

一方上で見ていた3人の破面は

「あらら、ノイトラのやつもう解放しちゃったねえ」

いちばん右端の男が言った。すると

「私たちもさっさと片付けるぞ」

真ん中の男が答える。刹那破面の後ろに凜とした声が響く。

「霜天に坐せ氷輪丸！」

端の2人は左右によけ真ん中の男は斬魄刀で防ぐ。

「十番隊隊長日番谷冬獅郎だ」

「セプティマ十刃ゾマリ・ルルーです。」

隊長ならば手加減はいりますまい」

といい後ろに下がると

「鎮まれ呪眼僧伽」
ブルヘリア

白いスーツに包まれ50以上の目が出現した。

残った2人は上に現れ

「さて、僕たちも闘うとするか」

ホロウ
と言つと虚と

メノスグランデ
大虚の大群が現れた。

「な・・！？なんて数だ！」

石田がそれを見ながら叫ぶ。後ろからハヤテが

「仕方ありませんね。野々原さん行きましょう。破面はそちらに任せます」

と言つと大群の方に目を向けると

「破道の三十一『赤火砲』！！」

「セーフティシャッター
超爆裂炎冥斬！！」

ハヤテは鬼道を、野々原は竹刀から火の竜を繰り出す。

それに当たった虚と大虚はあっという間に倒れていく。

「なんなのあいつら？明らかに今隊長格クラスの霊圧放ってたじゃない」

乱菊が驚きながらいう。

「ふつ、やっぱりあの2人はすごいなあ」

「私たちも負けてられないわ」

氷室とヒナギクも飛び出す。

「正宗！！」

ヒナギクは木刀・正宗を呼び次々と虚を倒していく。

氷室はバラの花を使って倒していく。

「すげえなあいつら」

一角が鬼灯丸を肩にかけて眺めている。

「私たちもやるわよ」

そのシャナの言葉に悠仁、ヴィルヘルミナ、マージョリーがうなずく。

虚へと向かっていく。破面2人は

「な・・・大虚と虚の大群を一齐に倒しているだと・・・!?!」

「なあ、あんたらいつまでそうしてる気だ?」

2人が後ろ向くと一角が立っている。

「あいつらが虚と虚を倒してくれてんだ。闘う相手がいないんだ

よ。相手してくれ」

「ふっ、なら僕が相手しよう」

右の男が抜刀し、解放する。

「^{すす}啜れフォルニカラス」

斬魄刀を口から飲む込むと首から下を触手に覆われドレスを着たよう
うな

姿に変わり、背中には4本の細長い羽根が生えている。

「延びろ鬼灯丸!!」

鬼灯丸を構え

「更木隊第3席斑目一角だ!!」

「オクターバ十刃ザエルアポロ・グランツだよ」

お互い名前を名乗り闘いを始める。

一方もう1人の男も恋次とルキアと対峙していた。

「咆える蛇尾丸!!」

破面はそれをよけて仮面を取る。

「ふう、やっぱりこのふくはきついな・・・」

ルキアの顔が驚きの表情に変わる。

それは明らかに志波海燕本人であつた。

T o b e C o n t i n u e d

第2章：第6話：破面襲来！！（後書き）

作者「このコーナーは今回からキャラに任せる

ことにしました。司会はハヤテ君と一護君に

やってもらいます。ではどうぞ

ハヤテ「さて今日から第2章と言つことですが

破面襲来編ということらしいですよ」

一護「これもだいたい5話程度やるつもりらしいぜ」

ハ「次回楽しみに」

作「ちょっと次回はちゃんとやってよね

第7話（前書き）

今回の話は特定多数のキャラしか出ていません

第7話

「ど……どうして貴方が海燕殿!!」

そう叫ぶルキアが見つめる先には自分が尊敬していた海燕が立っている。

「どうした朽木？久しぶりに逢ったのにそう叫ぶなよ」

そう言いながら笑ってこっちに近づいてくる。

虚を倒していたハヤテがまずい、と言い破面とルキアの方へ向かっていく。

ルキアは自分の頭を抱えもがきはじめた。

この懐かしい感じは間違いなく海燕本人だ。

だが海燕は自分が殺した。生きているわけがない。

では前にいるのは誰だ？

しばらくもがいていたルキアだったがずっと体を持ち上げると

「お前は海燕殿ではない!!」

と言うと抜刀し斬魄刀を解放する。

「舞え、袖白雪」

純白な斬魄刀を持ったルキアは

「初めの舞、月白!!」

それを後ろに避けた男にルキアが襲いかかろうとするも

恋次がルキアを抑える。

「放せ!恋次!!あいつは私が倒す!!」

「うるせえよ!あいつは十刃だ!お前1人で闘って勝てる相手じゃ

ねえ！！

ここは2人で倒すんだ！冷静になれルキア！！！！」

破面の男を見上げながらルキアを抑える恋次。

ルキアもそれを見ながら破面を見上げた。

ふうと1つ息を吐き

「悪かったな、恋次。行くぞ」

ルキアの声に反応しおう、と返事をする

「吼えろ、蛇尾丸！！」

蛇尾丸で攻撃するが簡単に避けられてしまう。

恋次は2回目の攻撃を仕掛ける。それも簡単に避けられたが

後ろに下がった方向にはルキアが待っていた。

「次の舞、白漣」

それもさっと避けられてしまう。

「そいつは効かないな。どれも知ってる技だ。

俺が修行に付き合ってたんだ。俺の目の前で編み出した技だ

そんなの通用するはずないだろう朽木」

「くっ……！」

とその刹那、ハヤテの声が響いた。

「破道の三十一『赤火砲』！」

破面がとっさに後ろへ下がる。

ぽかんとしている2人の横にハヤテが並ぶ。

「なんであいつ、あんなに焦って後ろに下がった……」

「僕が教えてあげましょうか。向こうの世界ではこの世界は漫画になっていますので」

2人はハヤテに弱点を聞いた。それを聞いていた恋次がハヤテに聞く。

「それじゃあいつの弱点は光か……!」

「はい、そうです」

「だがなにか方法はあるのか……?」

ルキアがもつともな質問をする。ハヤテははい、うなずくと

2人に方法を伝えた。

それをみていた破面は

「今さらこそそなにしてんだ？俺を倒すのは無理だぞ」

「それはどうですかね？」

「どついう意味だ！！」

「縛道の六十一『六杖光牢』」

破面の体を六つの帯状の光が胴を囲むように突き刺さる。

動けない破面に3人が近付いていく。ハヤテは

「破道の三十一『赤火砲』」

と言う。威力を調整し照明にすると、

「うおおおおお！！！！」

海燕の顔がなくなり、透明なカプセルにボール大の頭が2つ浮いている姿が現れた。

「ちっ、はがれちまったか……。じゃあしょうがないね改めて挨拶をしておくよ」

2つの頭が交互にしゃべっている

「僕らはヌベール十刃、アールローロ・アルルエリだ」

ルキアと恋次は無言でアールローロをみつめる。

ルキアが何もだ、貴様はと問う。

「何度も言わせるな。俺達がヌベール十刃アールローロ・アルルエリ。」

顔のことなら黙ってなよ。僕らこの顔の感想なら当の昔に聞き飽きた」

3人はそれを無言で見つめ続けている。

アールローロは下を見ると

「六杖光牢か、現隊長の中では朽木白哉が得意とする鬼道だ」

「そんなことまで・・・」

「言っておくがお前ら3人で勝てると思うなよ」

六杖光牢を抜けて後ろへ下がる。

「ふん、俺の弱点を知ってるやつがいるんだったな。

だが僕らの能力は影さえあれば何度でも使える。

つまりこの夜の状態が続いている限り何度でもなあ」

再び海燕の顔に戻る。

「俺の能力は知っているんだろ？本来これはメタスタシアの霊体融合能力。

死して伏せこの虚圏に戻ってきたやつを俺が喰らって手に入れた！」

「喰らってだと・・・！？」

アーロニーロはおもむろに手袋をはずし

「これが俺の能力、グロトネリア喰霊。」

死した虚を喰らってその能力と霊圧を我が物とする力だ」

と言いつつ触手らしきものが手袋の下から姿を現れた。

思わずルキアの顔がしかめる。

「こいつは志波海燕の体で帰ってきたやつをその体ごと喰って手に入れた力だ」

それを聞いたルキアは

「そ．．．それでは．．．．．」

「そうだ！お前が感じた懐かしさは勘違いではない。

この体志波海燕のもの。体にはすべての経験が脳にはすべての記憶がそのまま残っている！！！！

つまりこんなこともできる」

「水天逆巻け掬花」

固まる2人に対してハヤテは冷静にアローロニーロを見つめる。

「だがお前らはここで終わりだ。最後に十刃の刀剣解放を見せてやるう。」

喰い尽くせ喰霊」

下半身が巨大な蛸のような姿に変わった。

「言っておくが十刃の刀剣解放を破面の刀剣解放と同等と思うなよ。

俺の喰霊は喰らった虚の能力をすべて同時に発言できる。

俺が今まで喰らってきた虚は33,650体・・・

ここから先は30000を超える虚の大軍勢と3人で闘うに等しい
と思え！！」

思わず固まる2人の横からハヤテが前へ出る。

「言いたいことはそれだけですか？」

「なんだと？」

「分からない人ですね。あなたのつまらない説明はそれだけですかと聞いたつもりなのですが」

「そうか。お前は俺の能力はすべて知っていたんだっとな。
ではすぐに殺してやろう」

アーロニークはそう言いながらこちらに近づいてくる。

だが次の瞬間、ハヤテの姿が目の前に現れる。

「なっ、バカな！お前はまだあの2人の隣に……！」

「破壊し尽くせ、バロム」

「くっ……」

斬魄刀を解放したハヤテにアーロニーロはとっさに動こうとするが

「おっと逃がさないよ。縛道の六十三『鎖条鎖縛』」

太い鎖が蛇のように巻きつき体の自由を奪う。

ハヤテは後ろに数歩下がり斬魄刀を掲げると

「破壊弾『カタパルト』」

そういうと無数の玉状の斬撃がアーロニーロに直撃する。

ハヤテは斬魄刀を鞘に戻すとルキアと恋次の方へ向かう。

ハヤテが2人のところにたどり着いた瞬間、アーロニーロが爆風の中から現れる。

それを見て驚く2人に対して、ハヤテはちらつと後ろに視線をやり

「八様六式・撃破滅却」

その刹那強力な爆発が発生しアーロニー口は巻き込まれて姿を消した。

第7話（後書き）

ハ「どうでしたでしょうか？今回は僕の新しい技が出ましたね」

ー「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ハ「えっと・・・・・・・・、どうしました？一護さん」

ー「いや？別に今回は俺の出番なかったなって

思ったただだが・・・・・・・・」

ハ「一護さん！！大丈夫ですよ。次の話では出番があると作者も言っていましたから！！」

ー「俺は一応この小説の主人公なんだよな？」

ハ「えっと・・・・・・・・ではまた次回」

作者へ一護ファン及び日番谷ファンの皆様

まことに申し訳ありませんでした。

次の話ではちゃんと登場してもらいますので…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3385f/>

ハヤテのごとく & BLEACH & 灼眼のシャナ

2010年10月11日01時08分発行